

長良川 恋の予感

珍味余白

1

ほんとうにあの人は来るのだろうか？
安易に乗った自分がくやしい。でも何故かウキウキしてしまう。
どうしてこんな事になってしまったのだろう。
名前も知らないあの人は今まで付き合ったどの若者とも違っていた。
イケメンでもないし、ステキな訳でもない。帽子の下の髪は少しだけ薄いよう
にも見えた。ただ、日焼けした笑顔に真っ白な歯が印象的で、誠実な人のよう
に思えた。
買ったばかりのジョギングシューズとウエアを気にしながら、私は約束の橋の
たもとであの人を待っていた。

この春、短大を卒業した私は就職にさんざん迷ったあげく、内定をもらった
出版社へ断りを入れた。故郷の父からは随分と叱られ母にはさんざん泣かれた
が、岐阜に来て知った河原町からやはり離れたくはなかった。
狭い路地と蕁の波、町屋の格子戸や竹駒寄せ、ひっそりとたたずむ河原町すべ
てが私を優しく包み込んでくれる。
幸いなことに河原町の人気レストランで雇ってもらった。しかも慣れるまでは
と昼間だけの勤務を許してくれた。

初夏のさわやかな川風が長い髪をもてあそび頬をなでていく。長良川の清流、
水面に浮かぶ鶺鴒舟や屋形船、緑滴る金華山、見るものすべてが美しい。
天気の良い日は堤防を歩いて帰ろう。夕日を浴びながら物思いに耽る帰り道は
大切な一時だ。ゆっくりと散策する老夫婦、犬に語りかけながら散歩するおば
さん、ジョギングの人達、おしゃべりに夢中な女学生。幸せそうな人々と交す
軽い挨拶は疲れを癒してくれる。

あの橋のたもとを曲がった途端、ぶつかりそうになって青年とすれ違った。
『アッ、ゴメン』そう言い残して、ジョギング姿の青年は足早に遠ざかって行った。
かすかに汗の匂いを残して…。
『マアなんて人』、
そう言おうとした私は思わず言葉を飲み込んだ。
若い男のかすかな汗の匂いが
いかにも爽やかだったから。



2

学生時代、私にも付き合った人がいなかった訳ではない。
しかし、あれが恋愛だったと言えるのだろうか。
イケメンだろうが美男子だろうが、私のまわりの男共はみな軽くチャラチャラしていて、薄っぺらな若い男は不誠実で不潔としか見えなかった。
その点、職場のおじさんは面白いし気が置けなくていい。それなりに気を使ってくれるから嫌な事は言わないし、時には適切な助言もしてくれる。
「いい加減な男ならやめた方が良いぞ」
「男はやっぱり3Sだな。誠実で清潔そして…いま変な事想像しただろう」
「やっぱり生活力が大事だよな」なんて。
あたり前だろうけど説得力がある。

雨上がり夕方、気持ちが良いから歩いて帰ることにした。
又あの人とぶつかったりして…なんて想像して期待する自分が情けない。
と、あの橋のたもとを曲がった途端、こんどは全身に泥水を浴びせられた。
ビックリして目が眩んだが、ようやく状況が呑み込めた。
目の前に罰悪そうな顔をしたあの人がいた。しかもせっせと足踏みをしている。
どうやら今度は水溜りの泥水を撥ねられたのだ。
『また君かい。ゴメンごめん』
『また君はないでしょう』と言おうとしたけど声が出ない。
『これで良く拭いてね。風邪ひくよ』と言いながら、汗臭いタオルを手渡すと
『ジャッ、またね』と走り去っていった。
『マア、なんて人でしょう』と言ってももう遅い。どうしたもんじゃろうのう
このタオル。捨てるわけにもいかないから持って帰ろう。

アパートの一室で悶々とした夜を過ごした。
あの人は何者だろう。
どこに住んでいて何をしているのだろうか。
どうしていつもあの橋のたもとで会うのだろうか。
待ち伏せして、私に意地悪しているのだろうか。
それにしても、あの爽やかさは何なのだろう。
どうしてあんな人の事ばかり考えてしまうのだろうか。
これって、もしかしたら…
悩んでも仕方がないから汗臭いタオルを洗って寝よう。



3

時々一緒に走ってくれるかなあ、あの子？
あんな風に女の子に声を掛けることができるなんて、思ってもみなかったけど俺もやるもんだ。
あの子が気なる、可愛らしい子。年齢は？仕事は？住所は？いろいろ知りたいけど、時々一緒に走ることができるのなら、それで充分と思わなければ。

俺の毎日は何の変化もなく決まった生活が淡々とつづく。根を詰めた手作業の後の、ジョギングだけが唯一つの楽しみ。当然若い女性と知り合う機会なんて在りはしない。

岐阜提灯の老舗に生まれた俺は、家業を継ぐのを当然として育てられた。しかし多感な年ごろになると、それが嫌でたまらなかった。地味で単調な家業に魅力を感じなかったし、当然のように仕事を教え込もうとする両親や従業員にも反発した。

大学を卒業しても、そのまま東京に留まり就職した。母は驚き嘆いたが親父は何も言わなかった。

華やかな東京での3年間、充実した仕事とお金さえあれば何でもそろう環境はとて満足だった。

しかし3年前、親父が倒れてから家業が気になりだした。200年も続く伝統工芸の歴史を親父の代で潰しては申し訳ないと思えた。そして帰ってきた。



あの子には何だかとても悪いことをした。ぶつかりそうになって驚かせ、誤って泥水を掛け汚れたタオルを渡してしまったのに、たいして謝りもしなかった。何も言わずキッと睨んだ後ののはにかんだ表情がとても可愛らしい。何に対しても積極的な東京の女性には馴染めなかったのに、あの子の前では素直になれるから不思議だ。

あの橋のたもとに女の子が立っている。
夕日を全身に浴びて光り輝いて見える。
あの子だ。
何と言って謝ろう。
ああ…ドキドキする。
『明日の朝一緒に走ろう。モーニング奢るよ』口がかって動く。
何てことだ。あれほどシュミレーションしたのに、思わず口走ってしまった。

4

あの人の事が頭から離れない。
お店でちょっとボウツとしていたら、「君にもようやく春が来たかい」なんてマスターにからかわれてしまった。
イケメンではないしステキな訳でもない。
でも少なくとも薄っぺらな男とは思えなかった。
誠実な人だろうか。たしかにゴメンと素直に謝ってくれた。
清潔な人だろうか。たしかに白い歯は印象的だった。
生活力なんて判らない。
でも今までとは違う。あの雰囲気、あの感じが男らしいと言うのだろうか。
私としたことが恋してしまったかも。

今日はキッチリ確かめよう。
悩み事が解決しないと夜も眠れない。これ以上ボウツとしてたらお店に迷惑がかかる。
あの橋のたもとで待ち伏せる事にした。
洗ったタオルには香水をつけて返してやろう。お気に入りの洋服のクリーニング代を請求してみよう。できればもう一度キッチリ謝ってもらおう。
どう出るか。それによってあの人がどんな人かきつと判ると思う。

夕日を背にして男が走ってくる。逆光だから判らないが、でもあの人のような気がする。
なんか凄く素敵な人に思えてくるから、そんな自分に戸惑ってしまう。
『ヤアッ 待っていてくれたのかい』なんてほざいた。
私は何も言い出せない。
『風邪ひかなかった、良かったね。ハイこれクリーニング代』なんて言いながらポチ袋を手の上に乗せられて固まってしまった。
『そうだ、明日の朝よかったら一緒にジョギングしよう。モーニングコーヒーでも奢るよ』
私は何も言えなかった。ただ『ハイ』と答えるのが精いっぱいだった。
バッグからタオルを取り出してそっと差し出した。
『ありがとう』顔一杯の笑顔と白い歯がとても眩しい。
ああっ…恋に落ちそう。
疑問はなに一つ解けない。
でも、もうそんな事どうでも良いように思えた。

つづく

